

学 位 論 文 要 旨

氏 名 鈴木 千春

題 目 小学校家庭科及び生活科における「家族や家庭生活」の授業での絵本の活用に関する研究

本研究の目的は、小学校家庭科及び生活科における家族や家庭生活に関する授業に有効な絵本活用方法を提案し、教材としての絵本の可能性を明らかにすることである。本論文の構成は全10章からなる。

第1章では、絵本がイメージを特定して伝えやすいという特性を有するメディアであることから、小学校家庭科及び生活科の家族や家庭生活の授業に、絵本を教材として活用することについて検討した。絵本活用の新たな課題から本研究の目的やアプローチの方法、論文の構成について整理した。

第2章から第3章にかけては、授業の目的に合致した絵本を制作した場合の有効な絵本活用方法を明らかにした。制作した教材は、家庭科用のデジタル絵本教材「家庭科かくれんぼ」である。本教材は、家族や家庭生活のイメージを伝えるために、日常によくあるお話から絵本画面を制作し、学習内容を具体的に伝えられる動画や写真を盛り込んだリンク画面を張り付けた構造である。デジタル絵本教材は、児童にとって家族や家庭生活をイメージしやすく、学習内容を具体的に伝えることに有効であった。また、教員の属性に関わらず概ね使いやすい教材であった。絵本を制作する場合は、イメージと具体が伝えられる構造のデジタル絵本教材が有効であることが分かった。しかし、授業の目的に合致した絵本を作り続けることに限界があることは課題となった。

第4章から第5章にかけては、市販されている絵本に着目し、授業の目的に合致した絵本の選定と、選定した絵本を活用した授業づくりの結果を示した。絵本の選定には、家庭科の授業に使用された100冊の絵本を対象にした。学習指導要領の家族や家庭生活に関する学習項目を含むものの中から調査用絵本として9冊を抽出し、そのうち授業者側と学習者側で読み取りにずれが生じなかった3冊を選定した。これら3冊は家族や家庭生活に関するイメージが特定でき、学習目標の達成が期待できることが示唆された。選定した絵本のうち「おんぶはこりごり」(アンソニー、ブラウン2005)の活用方法について大学生の授業づくりを検討した。結果、絵本を活用した授業を実施するには、絵本を提示するだけでは成立しないことが分かった。特に児童が迷わずに考えたり書いたりするための授業用教材が必要であることが分かった。

第6章から第7章にかけては、小学校家庭科の家族や家庭生活において絵本を活用する授業用教材の

作成と授業実践の結果を示した。児童が迷わず考えたり書いたりできる教材として2種類のWSを作成した。1つ目は、マジネーション育成のアプローチから、絵本の中の家族の一員の立場で、吹き出しに書くタイプのWS-A、もう1つは国語教育的なアプローチから、家庭科アドバイザーの立場で罫線に書くタイプのWS-Bである。絵本「おんぶはこりごり」と作成したWSの組み合わせによる授業実践の結果、いずれのWSを使用しても「家族の一員として家庭生活をよりよくする工夫を考える」学習目標は達成できた。特にWS-Bは、相手に提案をするような表現で、家庭生活をよりよくするために「役割を分担する」などの工夫が数多く具体的に出現した。小学校家庭科における有効な絵本活用方法は、絵本「おんぶはこりごり」とWS-Bのセットであることが示唆された。

第8章から第9章にかけては、生活科における家族や家庭生活に関する授業用教材の作成と授業実践の結果を示した。生活科の家族や家庭生活の授業に家庭科での実践が援用できることが示唆され、2種類のWSを作成した。1つは、家庭科のWS-Aをベースに、絵本の中の家族の一員の立場で吹き出しに書くタイプのWS-I、もう1つは、WS-Bをベースに、家族をよくするアドバイザーの立場で罫線に書くタイプのWS-IIである。絵本「おんぶはこりごり」と作成したWSの組み合わせによる授業実践の結果、いずれのWSを活用しても「家庭生活をよりよくするための方法を考え、家族の一員として協力する必要性がわかる」という学習目標は達成できた。特にWS-Iが、家庭生活をよりよくするための方法を数多く記述できていた。生活科における有効な絵本活用方法は、絵本「おんぶはこりごり」とWS-Iのセットであることが示唆された。

第10章では、本研究のまとめとして各章で得られた知見を整理し、以下を結論として示した。本研究では、小学校家庭科及び生活科における家族や家庭生活に関する授業を通して、絵本が授業の目的を達成できる教材になり、学習に必要なイメージ形成を支援できるメディアであることが示唆された。有効な絵本活用方法として、絵本を制作する場合は、イメージを伝える絵本画面に学習内容の具体を伝えるリンク画面を張り付けた構造のデジタル絵本教材「家庭科かくれんぼ」が提案できた。市販されている絵本を活用する場合は、絵本を提示するだけでは児童が学習活動に迷う恐れがあったため、考えたり書いたりするためのWSとセットで活用することが提案できた。特に、絵本「おんぶはこりごり」と家庭科ではWS-B、生活科ではWS-Iのセットが推奨された。

絵本は、読者の自由な解釈や発想にゆだねられた活用が多い。そこに新たな絵本活用の可能性を見出したことは本研究の成果と言えよう。それはイメージを特定する必要がある学習に、絵本が有効な教材として活用できる示唆が得られたことにある。特に小学校家庭科及び生活科における家族や家庭生活の授業用教材として、有効な絵本活用方法が提供できたことは、今後の絵本を活用した教材開発の研究推進と授業実践の考案に寄与するものであると考える。